



TITLE:

岡道男先生の教え

AUTHOR(S):

高橋, 宏幸

CITATION:

高橋, 宏幸. 岡道男先生の教え. 西洋古典論集 2001, 別冊: 150-153

ISSUE DATE:

2001-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/68691>

RIGHT:

岡道男先生の教え

高橋宏幸

岡先生のご病状が悪いのを中務さんから伺ったのは昨年暮れ、教室の研究会が終わってすぐのことだった。すでに、あとのことをお考えである、という。そのときに『アエネーイス』翻訳の引き継ぎの話も出て、力不足と思いながらも、演習で読んできたこともあり引き受けた。ただ、年が明けてから、岡先生に手紙を書いて、できることなら先生に仕上げていただきたいが、引き継ぐとすれば、全体の統一から先生の訳稿に手を入れなくてはならないこと、しかし、先生との共訳とさせていただきたいことを記し、ご了解を求めた。手紙を書いたのは、話をすると疲れから、あとの痛みが辛い、と伺っていたためだった。ところが、数日後、先生からお電話をいただいた。自由にやってもらってよいし、自分の訳がどんな形であれ生かされ、そのうえで、共訳としてもらうことは嬉しい、と言われた。それが先生と話す最後の機会となった。お声の様子はかなり変わっていらっしゃったのに驚いたが、お心遣いは変わらず、有り難さと痛々しさが交錯した。あとで伺うと、岡先生は体の状態にかかわらず心の働きを鈍らせる処置を取るのは最後の最後にしてくれるよう望まれたという。厳しい、と感じる以上に思いが及ばない。『アエネーイス』翻訳の原稿は九月はじめに学術出版会に渡すことができた。その最後に、共訳を希望した理由として、訳業に当たり、先生からは原稿だけではなく、これまで受けてきた教えをも預かったから、ということを書いた。記した気持ちに偽りはないが、本当にどれだけの教えを預かったのか、というと実に頼りない。もちろん、岡先生の学問的な経験と蓄積はただ見上げるだけしかできないけれども、次に生きるために、次に生かされるように、ということが先生の最後の教えであったように思い、そこから心に浮かんできた先生の思い出を記してみる。

これは京大の学風であろうが、やかましい学生指導ということがない。岡先生も学生に向かって、これこれのことをやってみなさい、と言うことはほとんどなかった。諸先輩やまわりの人を見ると多士済々、それぞれの関心から課題を見出して成果を上げられており、学生に学ぶ力のあるかぎり、それはよい伝統なのだと思う。しかし、最近、それでは通らないという声が内外に喧しい。その状況が問題を適切に捉えているかどうかはよく分からないけれども、いま

学生を指導する立場になって、また、アメリカでの学生指導の仕方を多少とも知り、クレイク先生からも、学生はどうやって研究課題を見つけているのか、と尋ねられる経験をして、諸先生方のように自然に学生に学び取らせる実力がない者は何か考えないといけないとも思う。筆者が助手の頃だったか、どうしてプロペルティウスをやるようになったか、と先生に尋ねられたことがあった。岡先生も、筆者のような頼りない学生にいつも一言言っておきたいことがあったに違いないと想像する。

そのときには、修士一回生のときにアポロニオス『アルゴナウティカ』を演習で岡先生に読んでいただいたが、その中にヒュラスとヘラクレスの挿話があり、これに興味をもって、テオクリトス第十三歌からプロペルティウス第一巻第二十歌へと関心が移ったことがきっかけだ、と答えたと記憶する。しかし、これは必ずしもすべてを尽くした答えではなかった。というのも、それ以前、岡先生の文学史の講義でラテン恋愛詩が取り上げられていたからである。これは先生が秋からドイツへ行かれた年で、前期だけであったが、その講義の中でプロペルティウスに心引かれるものがあった。先生への答えでこのことに触れなかったのは、いつもの舌足らずの悪癖によると同時に、『アルゴナウティカ』の演習が楽しい思い出となっていたことによる。

先生の『アルゴナウティカ』の翻訳が出版されたのはそれから二年ほどあとであったので、その準備もかねて力を注がれていたと想像するが、授業の出席者はずっと一人だけであった。それも寂しいことだったが、加えて、いまは跡形もない旧文学部西館の二回北側にあった研究室は薄暗く、十一月祭の頃ともなると、うすら寒い感じがした。いまでは見つけることも難しいようなダルマストーブが入るまでのあいだ、数回、どこか外に出てしよう、と先生から言い出された。出かけた先の進々堂も決して明るい雰囲気ではなかったが、コーヒーを傍らに、くつろいで静かな一時間半は、予習にかけた時間に比して、あっという間に流れた。

ラテン恋愛詩の講義で岡先生は、まだ邦訳がなかったせいもあるが、ロウブをコピーして教材に使っていた。主に英訳によって講義を進めながら、ときおり、ラテン語の詩句に言及して、その語順は意味に対応した配置をとっている、といったことを説明されたことが印象に残っている。先生は「観察」の重要性をよく述べられた。形に表れているものを見て把握するのがその第一歩で、それがここでも行われていたように思う。第二歩は個々に把握したもののあいだに関連を見つけることで、いつだったか先生が、それが二つ以上あると

論文の土台になる、とも言っていたことが思い出される。有機的な関連という点では、講義でもプロペルティウス第四卷第十一歌に盛り込まれた葬儀の慣行や文学的常套と、それらが形づくる構造に触れておられ、それが数学の証明問題を聞くように明晰であると同時に新鮮であった。この明晰さが驚きに感じられるというのも、いま振り返れば、文学の解釈というものについてほとんど知らなかったためだと思う。学生の論文試問や研究発表会でクレイク先生はまず clear であるかどうかということコメントされる。また、研究室で筆者が博士課程研究報告の予備発表をしたときのこと、しばらく先生をはじめ出席者のあいだで質疑応答のような話があったから、議論をしていると問題が見えてくるね、と先生が言われたのを思い出す。明晰であることはひとりよがりでないことの証しだった。観察の第三は、言うまでもなく、自分が見て取ったものを従来の研究の中に位置づけることである。この点で、筆者のように自信をもつだけ芯が通っていない人間は自分の考えていることが意義のあることなのか、学生時代にいつも不安を感じていたし、いまでも怪しいな、と思うことがよくある。そうした宙ぶらりんの気持ちを岡先生は払拭してくださった。ご批判をいただければ、自信を持つにせよ失うにせよ、それで判断がついたからである。

岡先生のお名前が頭に刻まれた最初は二回生で受けたラテン語文法の授業のときで、当時の水野先生が「神様のような」と言われた。三回生に進んで実際に授業を受けてから、これにはなるほど、と思った。すべてに目配りが利いている点で、松平先生に $\Delta\iota\omicron\varsigma\ \beta\omicron\upsilon\lambda\eta$ があるとすれば、岡先生は *fatum* を背負っているなどと考えたりした。けれども、いまは少し見方をあらためた。というのは、運命を知っている神であれば、すべてが見えているが、それならば、何かを新たに見つける、ということがなく、とすると、発見の喜びがないことになり、これは大変な遺失だと思われるからである。ご退官記念パーティーでのことだったか、袋綴じの本にペーパーナイフを入れて初めて開く快感のことを先生が話された。そのときはやや俗な感興のようにも思えたが、いまは、先生の喜びは本を開いたあとに見つかったものにあっただと想像している。

その一方、この喜びの大きさが人間の視野が限られていることと裏腹の関係であることを岡先生は厳しく捉えておられたように思う。先生は、「西洋古典学研究」に発表された最後の論文の冒頭で、『オイディプース王』の基本構造あるいは劇構造と呼ぶものについて論じるに当たり、「基本構造あるいは劇構造は、主として人物の行動形式から看取されうるもの」とし、それは「外部から観察する者」によって認識されうるもの」で、「行動する当の人物によっ

て認識あるいは意識されうる類のものではない」と記している。「外部から観察する」というのは想像以上に困難なことだと思う。たとえば、ある実験結果が観察されたというとき、最後に出た結果も重要かも知れないが、それだけでは意味がない。結果を左右するすべての条件と要因を把握していなければならない。つまり、観察する範囲を限定することで、その範囲について神の目を備えることが「外部から観察する」ことである。しかし、このことは人文科学の多くの分野においては本質的に難しい。どこに立てば「外部」と言えるのか、そのために、観察範囲をどう限定すべきか、その手続き自体が明確に定めにくいことがしばしばだからである。そうした状況は明瞭な結論が出せないことへの言い訳になったり、自分勝手な議論に流れる誘因になったりすることもある。しかし、岡先生にはそうした弱さが微塵もなかった。

教室の研究会などの席で岡先生が、それはだから解釈だね、と言われるのをよく聞いた。「それは解釈」という部分は人それぞれの見方でどのようなにも分かれることで、そうして残る議論の余地は認めなければならないが、重要なのは、そこに至るまでの土台に確かな観察をどれだけ積み上げているか、である。その点で、先生の言葉には寛容が示されているとともに、御自分ならもう少し手を尽くすかも知れない、という含意があったようにも思う。いずれにしても、学生に対して先生はまだ試みられていない観察の視点を辛抱強く一緒にさがしてくださった。

他方、しかし、いつのことだったか、なにかの雑誌に掲載されたある古典関係のエッセイが話題になったとき、どのような意見でも発表して悪いことはない、というようなことを誰かが言ったのに対し、先生は、そうかなあ、と強い疑問を呈された。このことと合わせて思い起こされるのは、十年前にバークリーにいたとき世話になったアンダーソン教授が、ある気鋭の若手学者による当時注目を集めた著書について、目を向けるべきものに触れずにいる、と言って批判されたことである。

結局、問題は人柄に関するのだと思う。自分に不利益なこと、不都合なものにも正面から向き合える勇気と度量が問われていると思う。その点で、岡先生は最後まで御自身に厳しかった。先生の厳しい目を自分の心から忘れることなく、先生の御霊の安らぎをお祈りしたい。

moribus et caelum patuit: dignus requiescat,

cuius honoratis ossa vehantur aquis.

(Prop. 4.11.101-2, partim modif.)